教科書文庫
4
110
31-1928
2000018267

尋常小學修身書

複式編制學校
第三四學年兒童用乙

文部省

40438
教科書文庫
4
110
31-1928
2000.0
18267

教科書文庫
4
110
31-1928
2000018267

尋常小學修身書

複式編制學校
第三四學年兒童用 乙

文部省

広島大学図書
2000018267

資料室
375.1
M014

広島大学
18267
図書

學士院圖書

教育ニ關スル勅語

もくろく

第一　おやのおん……一
第二　かうかう……四
第三　兄弟なかよくせよ……六
第四　しごとにはげめ……七
第五　しんるゐ……九
第六　學問をつとめよ……十一
第七　友だちはたすけあへ……十四
第八　からだについてのこころえ……十六
第九　めいしんにおちいるな……十九
第十　そせんをたつとべ……二十一
第十一　ぎやうぎ……二十二
第十二　けんそん……二十四
第十三　皇后陛下……二十六
第十四　能久親王……二十九
第十五　ちゆうくんあいこく……三十三
第十六　ちゆうゆう……三十六
第十七　やくそくを守れ……三十九
第十八　しやうぢき……四十一
第十九　おんをわすれるな……四十三
第二十　法令を重んぜよ……四十六
第二十一　共同……四十八
第二十二　こうえきをはかれ……五十一
第二十三　じぜん……五十三
第二十四　よい日本人……五十七

複乙三四

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

帝國大學圖書之印

第一　おやのおん

二宮金次郎の家は大そうびんぼふであつたので、父母は金次郎たちをそだてるために、色色くらうをしました。

ある時父がびやうきになつて、おいしやにかかりました。くすりのおれいが出來ませんので、しかたがなく、でんぢを賣りました。びやうきがなほつてから、父はおいしやの

複乙三四

家へおれいに行き、そのかねを出しましたが、おいしやはきのどくに思つて、うけ取りません。父はおいしやのしんせつをよろこび、しひてそ

複乙三四
複乙三四

の半ぶんをおいてかへりました。その時金次郎は門口に出て父のかへりをまつてゐました。父はうれしさうなかほをしてかへつて來て、金次郎においしやのしんせつをはなしてきかせ、「これでおまへたちをそだてることが出來る」といひました。

父母ノオンハ山ヨリモ高ク、海ヨリモフカシ。

第二　かうかう

金次郎はかうかうな子で、小さい時から父母の手だすけをしました。

金次郎が十四の時父がなくなりました。母はくらしにこまつて、すゑの子をしんるゐへあづけましたが、そのばんからよくねないでかなしんでゐました。金次郎はこれは母があの弟のことをしんぱいして居られ

複乙三四
複乙三四

るからであらうと思ひ、「私がはたらいて弟をやしなひますから、よびもどして下さい。」とねがひました。母はその夜すぐにしんるゐの家へ行つて、すゑの子をつれてかへり、おや子いつ

しよにあつまつて大そうよろこびました。

第三　兄弟なかよくせよ

それから金次郎は朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきぎをとつてそれを賣りました。又夜

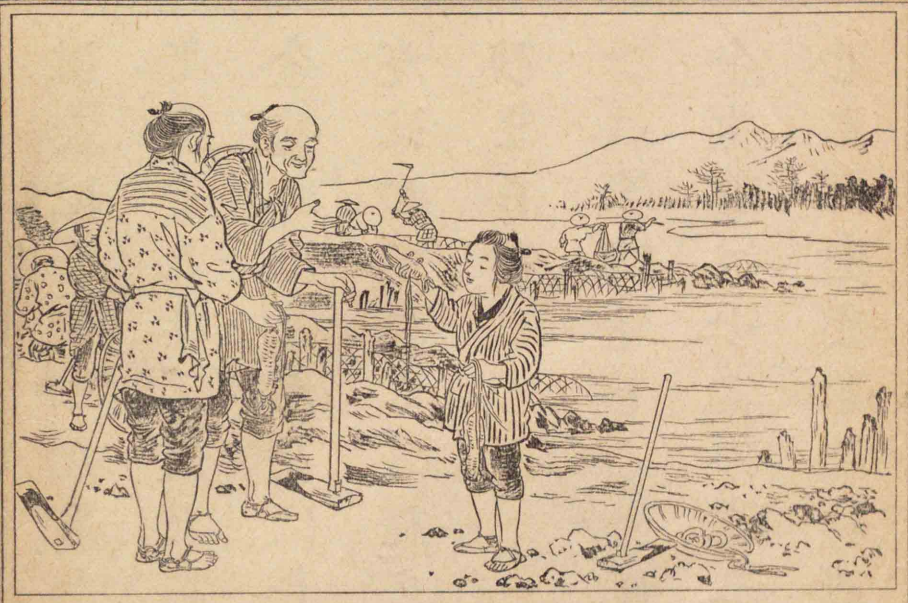
複乙三四
複乙三四

はなはをなつたり、わらぢをつくつたりして、おそくまではたらきました。

金次郎はこんなにして少しのじかんもむだにせず、よくはたらいて弟たちをやしなひました。

第四　しごとにはげめ

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶしんに出ました。しごとをすまして、家へか



へりますと、わらぢをつくつて、あくる朝しごとばへ持つて行きました。そして人人に「私はまだ一人前のしごとが出來ませんので、みなさまのおせわになります。これはお

復し三四
複乙三四

れいのしるしでございます。」といつて、そのわらぢをおくりました。

その上金次郎は人人の休んでゐるひまにも、土や石をはこんで、力のかぎりはたらきました。それでかへつて、おとなよりもたくさんしごとをしたと申します。

第五　しんるゐ

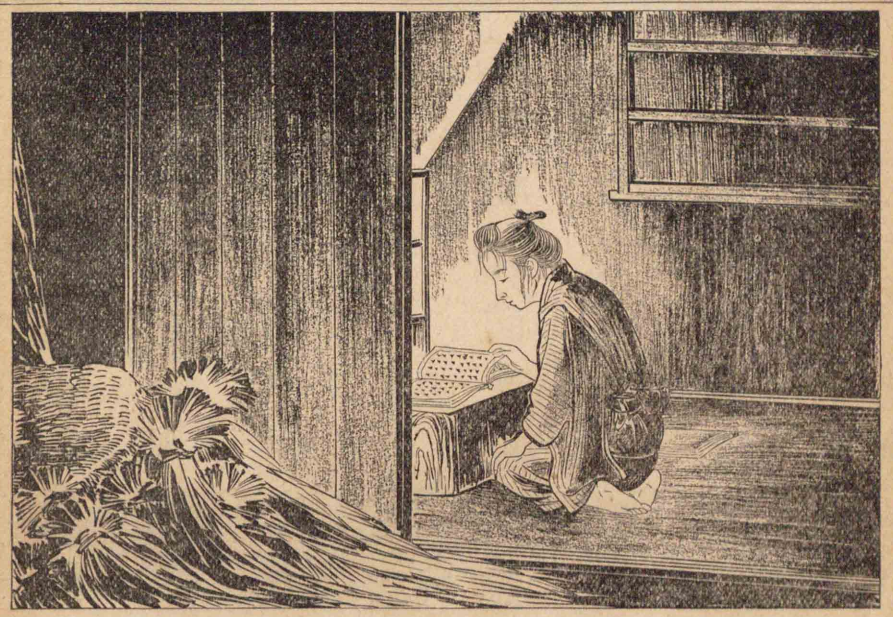
金次郎が十六の時、母がびやうきにかかり

ました。金次郎は大そうしんぱいして色色かいはうしましたけれども、とうとうなくなりました。金次郎はたのみにする母にわかれ、二人の小さい弟と、あと

にのこつてどんなになげいたでせう。やがてしんるゐの人たちがよりあつて、「三人のものが大きくなるまで、わけてあづかることにしよう。」とさうだんしました。それで金次郎はまんべゑといふをぢの家へ引取られました。

第六　學問をつとめよ

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、い



ちにちはたらいて、夜になると、本をよみ、字をならひ、さんじゆつのけいこをしました。をぢが「夜學(やがく)のためにあぶらをつかふのはよくない。」といひましたから、金次郎はじぶ

んであぶらなをつくり、そのたねを賣つてあぶらを買ひ、まいばんべんきやうしました。をぢが又「本をよむよりは夜もうちのしごとをせよ。」といひましたから、金次郎は夜おそくまでしごとをして、そのあとで學問をしました。

金次郎は二十さいの時じぶんの家へかへり、せいだしてはたらいて、のちにはえらい

人になりました。

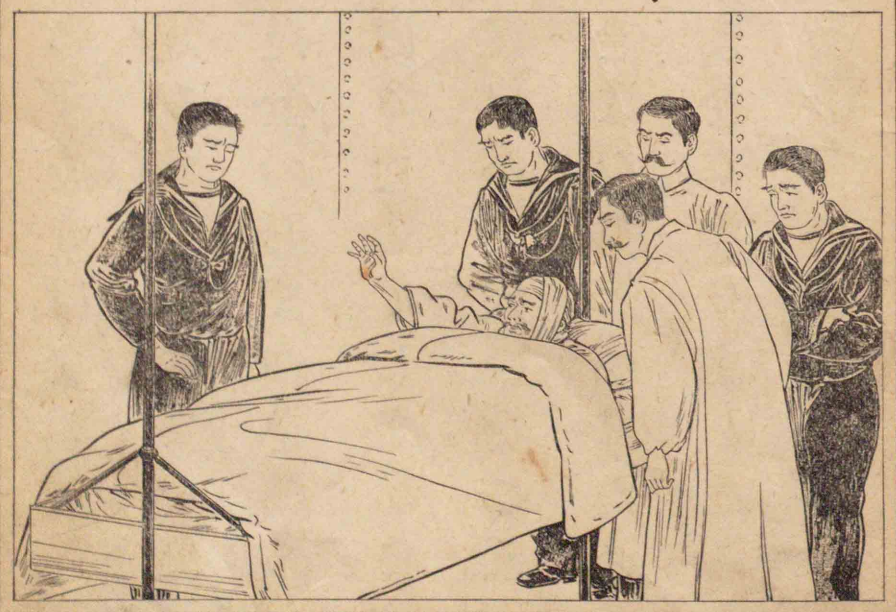
玉ミガカザレバ光ナシ、人學バザレバ智ナシ。

第七　友だちはたすけあへ

かいぐん一とうすゐへい坂井定三郎は、ぐんかんにゐた友だちがべんきやうのために大阪へ行つたので、じぶんのきふれうの中から時時金をおくつてたすけてやりま

複乙三四

した。めいぢ三十八年五月日本海のいくさのあつた少し前にも、金をおくらうとしましたけれども、つがふがわるかつたので人からかりておくりました。間もなく定三郎



はいくさに出て重いきずをうけました。とてもたすかるまいと思ひましたので、そばにゐた友だちに、かりた金のしまつをたのんで、それきり氣がとほくなつてしまひました。しばらくすると、にはかに大きなこゑで大阪の友だちの名をよび「しつかりたのむぞ。」といつて、そのままなくなりました。

第八　からだについてのこころえ

夜乙三四
複乙三四

伴信友（ばんのぶとも）は毎日朝起きた時と夜ねる時に、姿勢（しせい）を正しくしてすわり、三四十ぺんもしんこきふをし、又毎朝つめたい水であたまをひやしました。その外、朝ばん弓を引いたり、はをつぶした刀をふつたりして、よくうんどうしました。かやうに信友はからだをたいせつにしたので、年をとつてもぢやうぶで、たくさんの本をあらはすことが出來ま

した。

すべてからだをぢやうぶにするには、姿勢に氣をつけ、うんどうをおこたらず、着物はせいけつにし、ねむりやしよくじは、きそく正しくしなければなりませ

複乙三四

複乙三四

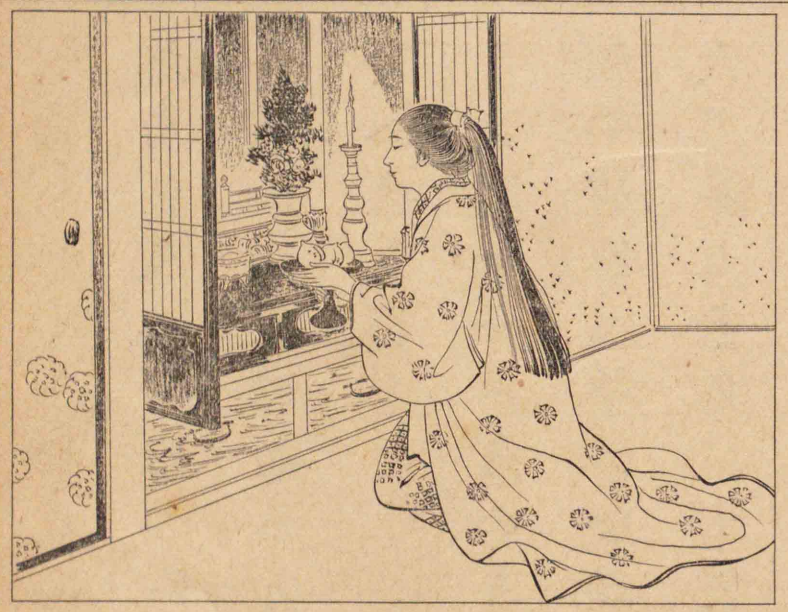
ん。又からだにあかをつけておいたり、うすぐらい所で物を見たりしてはなりません。

第九　めいしんにおちいるな

ある町に目をわづらつてゐた人がありました。めいしんのふかい人で、ある所のお水をいただいて、それを目にさしてゐましたが、日日わるくなるばかりでありました。ある日しんるゐのものが見まひに來ておど

ろいて、むりにおいしやの所へつれて行きました。おいしやはよく見て、「早くお出でになればよかったのに、今になつては、とてもなほりません。」とまうしました。

第十　そせんをたつとべ



稲生（いなふ）はるはまい月一日十五日、その外そせんの忌日（きにち）には朝早くからおき、からだをきよめて、ぶつだんのさうぢをし、花をささげ、かうをたき、色色そな

へ物をして、つつしんでおまつりをしました。もし人からめづらしいくだものなどをもらふことがあると、きつとぶつだんにそなへました。

第十一　ぎやうぎ

松平好房（まつだひらよしふさ）は小さい時からぎやうぎのよい人で、かりそめにも父母の居られる方へ足をのばしたことはありませんでした。よそ

へ行くときは、そのことを父母につげ、かへつて來たときは、かならず父母の前へ出て、その日あつたことをくはしくはなしました。父母から物をいただくときは、ていねいにおじぎをしてそれを受け、いつまでもた

いせつに持つて居ました。又人が父母のはなしをすると、かならず居なほつてききました。

シタシキ中ニモレイギアリ。

第十二　けんそん

吉田松陰のでしに久坂玄瑞と高杉晉作といふ二人のすぐれた人がありました。玄瑞はおこなひをつつしみ學問にはげみましたので、松陰はつねに玄瑞をほめて居ました。晉作ははじめはべんきやうしませんでしたが、後には心をあらためてべんきやうして大そう學問が進みましたから、松陰はことをきめるときに、多く晉作とさうだん

しました。玄瑞は晉作をほめて「高杉君はえらい人だ。じぶんはおよばない。」と言ひます。晉作は「久坂君こそりつぱな人だ。じぶんはおよばない。」と言つて玄瑞をほめました。松陰は二人がたがひにけんそんしてほめ合つて居るのをきいて大そうよろこびました。

複乙三四

第十三　皇后陛下（へいか）

皇后陛下はお小さい時から、きまりよくあらせられました。おもちひの御しなは大せつにおとりあつかひになり、ごじしんでごせいとんになりました。また御學問や御うんどうなどの日日の御きまりは正しくおまもりになつて、けつしてそれをおたがへになりませんでした。

陛下はまた大そうおやさしくあらせられ、

複乙三四

人人をおあはれみになりました。まだ久邇の宮家にあらせられた時、ある夏、地方にごりよかうになりました。その時おほぜいのせいとがお出むかへまうしてゐるのをごら

複乙三四

複乙三四

んになつて、「さぞ暑いでせう」とおほせられて、おやさしくおいたはりになりました。また大正十二年にくわんとうに大ぢしんがあつた時、さいなんにあつた人たちをきのどくにおぼしめされ、ごじしんでたくさんの着物をおぬひになつて、こまつてゐる人たちにたまはりました。

第十四　能久親王

能久親王（北白川宮）はめいぢ二十八年五月臺灣のぞくを御せいばつなされるために臺灣へおわたりになりました。おつきになつても、お休みになるやうな家がないので、砂の上にまくをはり、そまつないすをおいて御座所（ござしよ）としました。又御しよくじにはさつまいものむしやきをさし上げました。それからだんだん軍をお進めになりましたが、へいしとともに大そう御なんぎをなされ、御病氣（ごびやうき）におなりになつても、少しもおいとひなされずおさしづなさいました。ぞくはたいてい平らぎましたが、南の方に

まだのこりのぞくがゐましたので、その方へお進みになりました。そのとちゆう、又御病氣におかかりなさいました。ぐんいは「お とどまりになつて御やうじやうあそばされるやうに。」と申し上げましたが、親王は「わが身のために國のことをおろそかにすることは出來ぬ。いきのあるまでつづける。」とおほせられ、きゆうくつなかごにのつて、な

ほお進みになりました。親王はかやうに國のためにおつくしになりましたが、かなしいことには、御病氣が重くなつて、まもなくおかくれになりました。

第十五　ちゆうくんあいこく

昔和氣清麻呂（わけのきよまろ）といふちゆうぎな人がありました。その時道鏡（だうきやう）といふ僧（そう）が高いくらゐに居ましたが、道鏡にへつらふものが、時の

天皇に「うさはちまんの神が、道鏡を天皇の御くらゐにつけたなら、天下太平であらうと御をしへになりました。」と申し上げました。天皇は大そう御しんぱいあそばされて、清麻呂に「うさへ行つて今いちど神の御をしへをうけたまはつてまゐれ。」と御いひつけになりました。

複乙三四

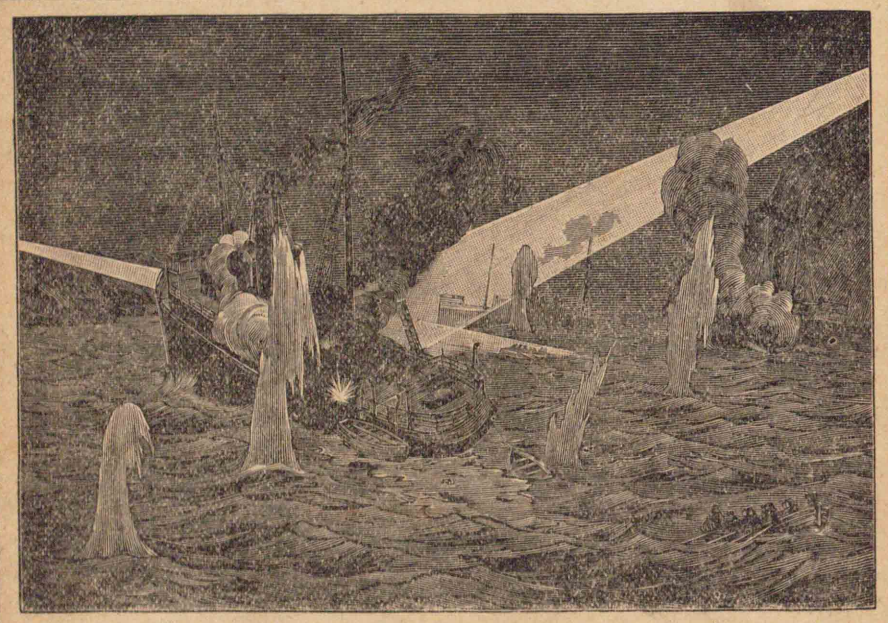
道鏡は清麻呂をよんで、「じぶんが天皇になれたなら、おまへに高いくらゐをさづけよう。」と申しました。清麻呂はうさへ行つて神の御をしへをうけ、やがてかへつて來て、天皇の御前へ出て、道鏡のきいて居るのもおそれず、「臣下のみぶんで天皇の御くらゐを

のぞむやうなものは早くのぞけと、御つげになりました。」と申し上げました。

第十六　ちゆうゆう

めいぢ三十七年わが國がロシヤといくさをしたとき、わが國のかんたいは、てきのぐんかんが旅順（りよじゅん）から出られないやうに、きせんをしづめて、みなと口をへいそくしました。これは大そうあぶないしごとでありま

複乙三四



したが、三どまでおこなつて、思ひどほりにしとげました。へいそくたいの人たちはちゆうぎなぐんじんばかりであつたから、くらい夜中に、みなと口へすすみてきのたい

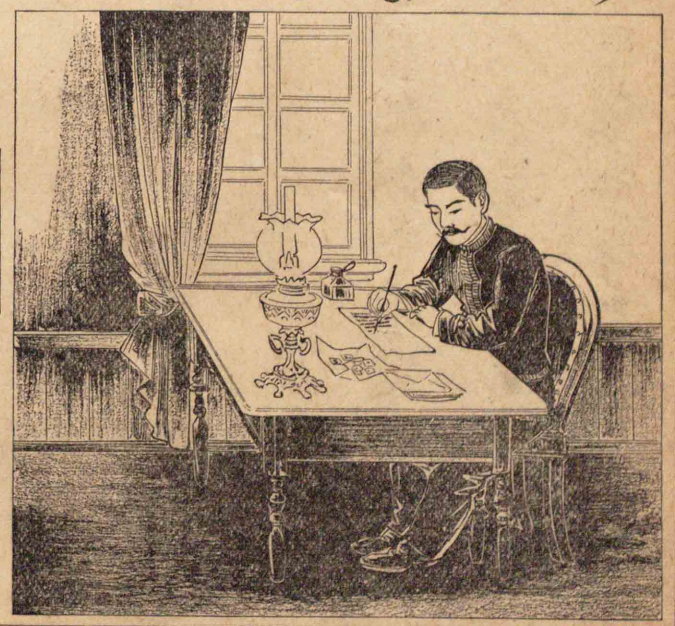
はうのたまが雨あられのやうにふりそそぐ中で、いさましくはたらきました。又行く人をきめるときには、いつものぞみてが多くて、さきに行つた人はぜひいま一ど行つてやくめをつくしたいとねがひ、さきにも れた人はこんどこそは代りたいと申し立て、だれにきめてよいか、こまつたほどでありました。

第十七　やくそくを守れ

廣瀬武夫（ひろせたけを）がロシヤへ行くとき、ある子どもに「かへりにはロシヤのいうびんきつてをたくさんみやげに上げよう。」とやくそくしました。

武夫はロシヤから日本へかへる道で、大そうなんぎな所を通ることになりました。その前の夜、武夫はやどやで「もしもぶじにか

へれなかつたら、いうびんきつてをまつてゐる子どもは、どんなに力おとしをするだらう。」と思ひました。それですぐにその子どもにあてた手紙をかいて、ロシヤのいうびんきつてを入れ、それをじぶんの兄さんの



所へおくつて、「もし私が死んだら、この手紙をとどけて下さい。」とたのんでやりました。

第十八　しやうぢき

ワシントンは父からもらつたをのを持つて、にはへあそびに出ました。そこには色色な木がうゑてありましたが、中に父がことさらだいじにして居たさくらがありました。ワシントンは何げなく、をのをためさう

と思つて、それを切りたふしました。

しばらくして父はにはへ出て來て、「このさくらはだれが切つた。」とワシントンにたづねました。

ワシントンははじ

めてわるいことをしたと心づいて、「私が切りました。」と少しもかくさないで答へてわびました。父はワシントンをだきかかへて、「木を皆なくしてもをしくはない。おまへのしやうぢきなのがうれしい。」といつて大そうよろこびました。これはワシントンの六さいの時のことでありました。

第十九　おんをわすれるな

彌兵衛の主人はめしつかひのものがつみをおかしたかりあひで島ながしになりました。彌兵衛は大そう主人のみの上をしんぱいし、どうかして島へみまひに行つて主人の心をなぐさめたいと思ひました。それでまづ一心に船をこぐことを習つて、とうとう船やくにんの手下になりました。そのうち折があつて、はるばる島へわたつて

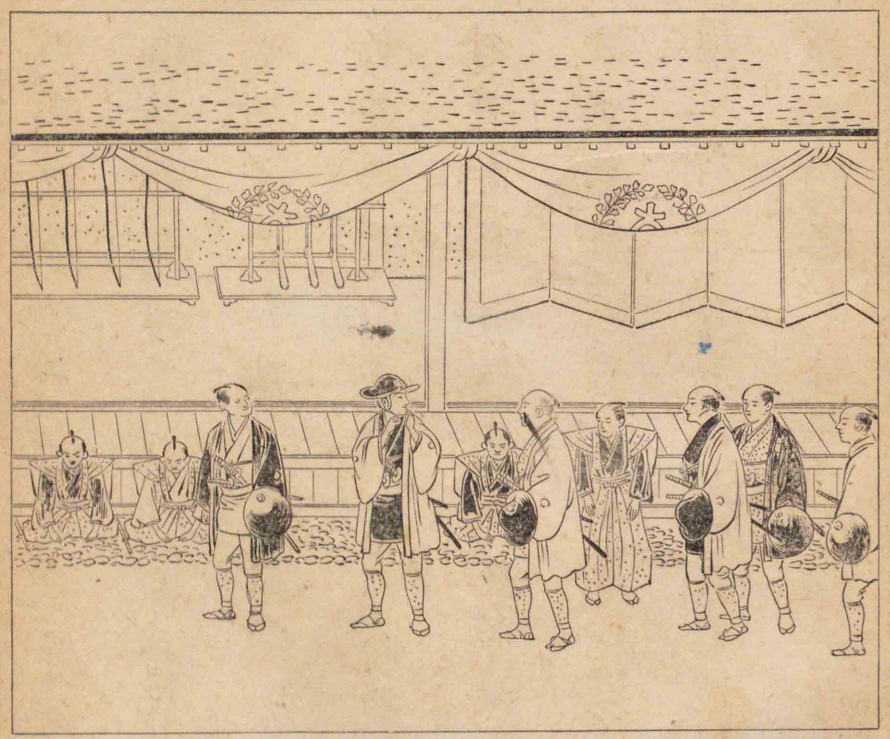
主人にあひ、年ごろ心がけてたくはへておいた品品をおくりました。

そののち主人がゆるされてかへつて來ましたので、彌兵衛はじぶんの持つてゐた物を皆主人にさし出し、しんせつにせわをし

てよくつかへました。

第二十　法令を重んぜよ

昔ばくふの重い役人に松平定信といふ人がありました。或年定信はかさをかぶつたまま相模の根府川の關所を通らうとしました。關所の役人が「規則によつてかさをお取り下さい。」といひました。定信はこれを聞くとすぐにかさを取つて通りました。その



日やどについて、定信は小田原藩の家老に「今日かさをかぶつたまま關所を通らうとしたのは、まことにじぶんのふこころえであつ

たそれを心づけてくれた役人にあつくれいをつたへてくれよ」とあいさつしました。

第二十一　共同

ある時毛利元就はその子の隆元・元春・隆景の三人に一つの書きものをわたしました。その中に「三人とも毛利の家を大せつに思ひ、たがひに少しでもへだて心をもつてはならぬ。隆元は二人の弟を愛し、元春・隆景は

よく兄につかへよ」と書きました。又隆元へべつの書きものをわたして、「あの書きものをまもりとして、家のさかえをはかれよ」とねんごろにいましめました。それで兄弟は

いつしよに名をならべた請書を父にさし出し、「三人共同して父のいましめをまもつて行きます。」とちかひました。

その後隆元は早く死んで、その子の輝元が家をつぐことになりましたが、元春・隆景はよく元就のいましめをまもり、心を合せて輝元をたすけたので、毛利家は長くさかえることになりました。

第二十二　こうえきをはかれ

昔羽後の海べの村村では暴風が砂をふきとばして、家や田をうづめることが度度ありました。栗田定之丞といふ人がその害をふせがうと色色くふうしました。まづ海べの風のふく方にわらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろにやなぎやぐみの枝をささせましたら、皆めをふくやうにな

りました。そこでさらに松の苗木をうゑさせました。それがしだいに大きくなつて、つひにりつぱな林になりました。

定之丞は十八年の間このことにほね折り

ましたが、そのために風や砂のうれへがなくなつて麥・粟(あは)などの畑(はた)も所所に開け、又しようろやはつだけも生ずるやうになりました。この地方の人人は今日までもそのおんをありがたく思ひ、定之丞のために粟田神社といふ社(やしろ)を立てて年年おまつりをいたします。

第二十三　じぜん

昔大ききんのあつた時、羽前の鶴岡に鈴木今右衛門といふじぜんの心のふかい人がありました。田畑をはじめ諸道具まで賣つて多くの人をたすけました。今右衛門のつまも心だてのよい人で、ほどこしをするために着物るゐを賣りはらひ、はれの衣裳が二つだけのこつてゐましたが、「着がへがなくなつて外へ出ることが出來なければ、く

しやかんざしの入用もない。これらの物を金にかへ、もつと多くの人をたすけませう。」といつて、はれの衣裳も、くし・かんざしも、皆皆賣つてしまひました。

今右衛門ふうふにこの時十二さいになるむすめがありました。ある日同じ年ごろの女の子が物もらひに來ました。母はそれを見て、むすめに「あの子はひとへ物一枚でふるへてゐます。おまへの着てゐるわたいれを一枚やりませんか。」といひましたら、むすめはすぐによい方のわたいれをぬいで、それをやりました。

ワガ身ヲツメツテ人ノイタサヲ知レ。

第二十四　よい日本人

私どもはつねに天皇陛下・皇后陛下の御恩をかうむることのふかいことを思ひ、忠君(ちゅうくん)の心をはげみ、法令を重んじ、君のため國のために、忠ゆうなはたらきをして、臣民(しんみん)のつとめをつくさなければなりません。

又おやの恩のふかいことを思ひ、父母にか

うかうをつくし、そせんをたつとび、兄弟なかよくし、しんるゐの人によくまじはらなければなりません。

友だちにはしんせつにしてたすけあひ、人にまじはるには、けんそんで、ぎやうぎよくし、しやうぢきで、やくそくをまもり、人からうけた恩をわすれず、人と共同し、こうえきに力をつくし、じぜんの心もふかくなけれ

ばなりません。

その外學問にせいだし、めいしんにおちいらないやうにし、からだのけんかうにきをつけ、しごとをはげまなければなりません。

これらのこころえをよくまもると、よい日本人になることができます。

をはり

昭和三年一月廿五日翻刻印刷
昭和三年二月廿七日翻刻發行

尋常小學修身書兒童用乙
復式編制學校第三四學年兒童用乙

臨時定價金七錢い

著作權所有

著作兼發行者　文部省

昭和三年一月三十日
文部省檢査濟

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社

翻刻發行兼印刷者　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社
代表者　石川正作

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

打梨尋常小學校尋常學年教政式

打梨尋常小學校尋常學年教政式

広島大学図書
2000018267